

長谷川伸

メリケン波止場の杓掛時次郎

平岡正明



シリーズ
民間日本学者
7

長谷川伸

メリケン波止場の沓掛時次郎

平岡正明

リポート

は せ が わ し ん
長谷川 伸

——メリケン波止場の沓掛時次郎

ひ ら お か ま き あ き
平岡正明

1941年 東京都に生まれる。

1963年 早稲田大学文学部中退。

ジャズ評論家。

著 書 『騎組人宣言』

『山口百恵は菩薩である』(講談社文庫)

『日本人は中国で何をしたか』(潮出版社), 他。

1987年4月25日 初版第1刷発行

著 者 平岡 正明

発 行 者 小川 道明

定 価 1400円

株式会社 リプロポート

〒 171 東京都豊島区南池袋 1-16-22

西武流通事務館

電 話 東京 03 (983) 6191

©1987 Printed in Japan

装幀/平野甲賀

編集協力・校正/久保田光

編集担当/早山隆邦

印刷・誠和印刷 製本・大口製本

ISBN 4-8457-0272-X C0023 ￥ 1400 E

長谷川伸—メリケン波止場の沓掛時次郎—もくじ

序章 浜ッこの復活

I 遊女喜遊のミステリー

II 新コのデジャヴュ

III 三枚の絵

IV 新コ青春残俠伝

V 港^{ポルテーニヤ}唄・長谷川伸VS.カルロス・ガルデル

VI 喜遊をめぐる長谷川伸VS.三田村鳶魚

VII ジャズ大名と五雲亭貞秀

VIII 遊廓都市論

7

17

39

87

101

119

137

155

179

IX 烈女列伝・女の転形期

221

X 長谷川伸の河が注ぐ海

243

XI 大橋卷子と喜遊・ふたたび吾婦絵姿烈女競

275

あとがき

287

年 譜

291

人名索引

装幀 平野甲賀

口絵写真提供

共同通信
平岡正明

長谷川伸—メリケン波止場の沓掛時次郎—

序章 浜ッこの復活

オーケイ、はじめよう。一つの回想と最近の話題からだ。

横浜に行って、船の灯と街灯で「刺青奇偶」を読んできた。長谷川伸に酔い痴れたいなら、読みたい短篇などコピーにとり、日が傾いてニューグランドホテルの灯がにじみ、夕風で紙片が飛ばない時刻を選んで埠頭で読むのが最上。長谷川伸なんかにかぶれちゃってさ、たとえば「刺青奇偶」など読みたい夜は、センチメンタル・ホンキートンク・マン。

長谷川伸は横浜の作家である。

いれずみちようはん
刺青奇偶、

と読む。丁半バクチのことである。人を斬って所払となった手取の半太郎は、

江戸をしのんで下総行徳の船場に流れつき、助けた茶屋女と夫婦になったが好きならばやめられず、病で死んでゆく女房が半太郎に、きつとばくちはやめておくれと意見の骰子さいころを二の腕に彫ってやる、という二幕七場の人情ものだ。

半太郎

ここは江戸の風があたる処、小網町こあみちやうへは水の上たった三里余り。俺が、さつき新

河岸がしで見えねえ江戸を見ているといったのあ、この心持ちよ。聞けば手前も土地ツ子じやねえそうだから、さだめし故郷恋しの心はあろう。

何年前だったか、六月、雨が降っていなかった六月のある日ということはたしかだったが、海岸通りポートスクエア二階のレストランでとびきりからいカレーライスを食っているとき、有線放送で、エディ藩が歌う英語版の「横浜ホンキートンク・ブルース」を聴いたのがそもそのはじまり。

一人飲む酒悲しくて、映るグラスは過去の色、というのがこの曲、藤竜也作詞・エディ藩作曲の、視機関のぞきあかりみたいな「横浜ホンキートンク・ブルース」のシカケだろう。グラスのむこうに、亜麻色の髪サラって女と、その影をさがしもとめて、皮ジャン羽織ってほろほろさまよった男の、二つの影絵が見えるという横浜青春残俠伝である。

とびきりキザ。ハマでなきや生れないし、歌えない。ハマという場のなかに置かれると、歌詞、曲ともに完璧であるとしかしいようがない。バーボンの瓶を片手に、皮ジャンでほろほろ歩くなんて、港町でなきややってられないよ。知るかぎり、「ほろほろ」という語が謡曲で使われたのは、八代亜紀の「舟唄」とこれだけで、「舟唄」では「ほろほろ」は女の頬にかかる涙をあらわし、ここでは微醺ほろよいをあらわす。

日本語で聴いたときには、絵葉書的だった。ところが英語で聴くと、時間が積層されていた。

まるで雲母だな、と思った。

歌詞にある「フローズン・ダイキリ」とか「ヘミングウェイ」とか「オリジナル・ジョーズ」(関内にあるイタリア料理の店)という単語が、英語の川の中に、そこだけカタカナで

浮き上ってくる。英語構文のなかに浮んだカタカナの単語に爪をかけると、横浜百年の歴史が、雲母片を薄く剥がすように、そこからヒリヒリと剥がれてゆく効果に陶然となった。

ガラスの向うにこの町の歴史が積層されている。エディ藩の中国的な時間感覚なのだな、と思った。五雲亭貞秀が浮世絵にのこしておいた開港間もない時期の港町のにぎわい、豚屋火事で焼けた跡に本格的洋館が建ち並びはじめた本町通りの町並、広東劇を上演するチャイニーズ・シアターに群れる弁髪在南京人たちとゲーテ座に集るザンギリ頭たちが見える。「過去」というのは、日本語版で聞くと、マッカーサーがニューグランド・ホテルに入って

以来の四十年ほどの幅なのだが、英語ではじめて聴いたときには、大過去が目前にひらけた。その書割のなかを歩く亜麻色の髪のサラって女は、文久年間の遊女喜遊から、現代の、日傘をさし三越の紙袋を手に持ち白い服に赤い靴をはいて、午後三時になると大桟橋のほうからやってきて、馬車道の喫茶店「ウィーン」の化粧室で化粧直しをして吉田橋の方に歩いていく老娼婦「港のマリー」（伝説ではなく実在の人物である、一九八六年初夏、刑事を客引きして捕ったという記事が出ていた）までの幅で影絵を見るように、見えた。

この積層された時間の中に、鯉名の銀平や沓掛時次郎もあらわれたのだ。

過去にだけではない。中村川の三吉橋みきちのもと、旅芝居の常設小屋の三吉演芸場というのがあって、市川雀之助という座長の演じる口立て芝居（座長が座員にその日の芝居の粗筋を口で話すだけで舞台にのせる芝居）が、日々に長谷川伸世界を再現しているのを知ったのも、そのころのことだった。長谷川伸の世界は、ハマでは生きている。

最近の話をしよう。紐育インディ派のジム・ジャームツシュという監督の『パーマネント・バケーション』を観て、「刺青奇偶」をおもいだした。

青年は紐育から出てゆく。波止場に行く。瑞穂埠頭（ノースピア）あたりによく似ている殺風景な、鉄錆と、海風のからさだけを感じさせる埠頭だ。彼はこれから巴里に浮遊ドリップしようとしている。すると、巴里から紐育ヘドリフトしてきた青年とすれちがう。同じような年恰好、開襟シャツの衿をブレザーの外に出すノータイの着こなしや、先の丸い靴、手にした靴の大きさまで、二人は似ている。

「君はどこへ行くの？」

「巴里へ」

「そう。ぼくは巴里から来た。紐育はどうだね？」

「さあ、どこも変らんとするよ」

そのように二人の青年は埠頭から道路に上る階段わきの、バス停のところで声をかけあつて、

「紐育を出る記念に刺青タトゥーをしたよ。母親の名を彫ハキったんだ」

「いいね。ぼくはランプのダイヤだ」

二人は手首の彫物を見せあう。

いい！ 刺青芸術の観点からは、それは、元禄の遊女が契りの証に二の腕に刻んだ入ればくろほどの、稚拙なものだろう。国芳描く水滸伝豪傑百八人の浮世絵に範をもとめ、文化、文政、天保の時代に勇み肌躍った刺青芸術の華に及ぶべくもない。

ヨコハマへ来いよ。刺青師三代目彫よしを紹介してやるよ。腕に錨のいれずみの、ヤクザにや強いマドロスの……という歌の文句くらいの話はハマにくりやざらだよ、と俺はジャムッシュのそのシーンで、映画の中の青年たちに語りかけたくなった。

しかしこのシーンは稚拙な刺青だからこそ、いい。刺青師ともよべない下町のペインター

か、あるいは自分自身で、町を出る記念にワンポイント・アクセサリのように彫っていく。このシーンでジム・ジャームッシュは都市下層青年の挨拶を描いた。仁義、すなわち未組織プロレタリアートの挨拶。長谷川伸世界の、それとしない、紐育での再誕。

チャーリー・パーカーにあこがれる青年が下町に住んでいる。たぶん東欧系の移民の裔だ。母親は瘋癲病院にはいつている。ビル工事の音に、ベトナム時代の爆裂音をおもいだして地に伏せる先輩がおり、ロートレアモン『マルドロールの歌』を読むガールフレンドがいる。廃ビルの階段踊り場でメキシコ民謡「シエリト・リンド」を歌う狂少女がおり、そういう人がいるというだけのエピソードがつづられ、その一つに、青年がある日、年老いたニグロのジャズマンに会う場面がある。その男は青年に語る。

サキソフォン吹きがいた。彼は屋根に上って、「虹オーパー・ザ・レインボーの彼方に」を吹いていた。“Some where over the Rainbow”そのメロディーを高々と吹いたが、その次のメロディーが出てこなかった。忘れちゃったんだ。何回も同じメロディーをくり返し吹いた。屋根から落ちこちまった。するとパーポー、パーポーと救急車がやってきた。

このパーポー、パーポーというサイレンの音が、彼が思い出せずに屋根から転げ落ちた

“Someday I wish upon a star”という歌詞と同じ旋律である。ジャームツシュはそういう解説はしていないが。

屋根から落ちたサキソフオン吹きの話を青年に語る老いたジャズマンは自分自身を「彼」といつている。自分を「彼」とよぶ——そういうのは、黒人的な言いまわしをひきついだヒップホップの独特なやりかただから、そのかぎりで、ジャームツシュは、ギンズバーグ、ケラワック、レクスロスら一九五〇年代のビートニク世代のやりかたを再現している。

青年が公衆電話のわきに立っていると、オープントップに乗った女がやってきて、「ちょっとあなた、ダイヤルをまわして下さない」「自分でまわせばいいだろ」女は降りて来て、電話をかける。青年はためらいなくその車に乗り込んで盗んで逃げる。車を二百ドルで売って、旅費にして、巴里に行くのだ。このシーンでゴダール『勝手にしやがれ』の、小金持が公衆便所に入るのをみとどけて、自分もその横に並んでオシッコして、ポンと相手の首筋を叩いて財布を奪うやりかたを連想した。その意味ではジャームツシュは、一九六〇年代フランス映画のヌーヴェル・バーグ派をひきつごうとしている。ジャームツシュは、卒業制作としてこの映画を撮ったそうだ。日本の映画評論家たちのジャームツシュ論をまだ読んでいな